

竹内さんのウクライナ便り

「救援・中部」派遣団がウクライナから帰国した翌日の4月28日、ベルギー人のアラン・ダルー（? 日本では「アラン・ドゥ・アルー」という表記になっているようですが、フランス語表記はAlain de Halleux）という人が撮影したドキュメンタリー映画、『チェルノブイリ 4（フォー）エヴァー』の入場無料初公開がキエフの「映画会館」（ソ連時代からある映画関係者用の施設）であり、私は観に行ってきました。

この上映についての情報は、京大原子力実験所のIさんと古い付き合いの、キエフの物理学者Tさんがメールで流してくれたものです。

会場の前には、ラフな服装の若者たちが10人ほどたむろして歓談しており、中には昔の日本のロックローラーを思わせるような幅広のバンダナの人もいましたが、広いホールに入ると中は閑散としていました。それでも上映予定時間の19:00が過ぎる頃には、100人くらいは入っていたでしょうか。15分くらい遅れて、1957年生まれの監督の挨拶（ロシア語通訳付きのフランス語）があり、上映が始まりました。いきなり20代初めくらいのごく若い4人によるロックの演奏が鳴り響き、その情景と、ウクライナの若者が製作したチェルノブイリの立入制限区域を舞台とするコンピュータ・ゲームのグラフィック画面がスクリーン上で交錯。ロック・バンドが演奏する歌の題名が、どうやら映画のタイトルになっているらしいのですが、その4人はつい先ほど会場の入口で見かけたばかりの若者たちで、やがてドラマーの女の子がスクリーン上で語り始め…「あたしがこのゲームをやった時、パパに『リクヴィダートル（事故処理作業員）って何?』って聞いたら、『そりゃ、俺たちみたいにチェルノブイリで事故処理作業をやった人らのことだ』って言われてびっくり…」、バンドのメンバーがチェルノブイリ原発やプリピャチを訪れる光景と、事故後4号炉内に入って写真を撮った事故処理作業員・石棺関連の文書を収集している歴史家・元最高会議チェルノブイリ問題委員会委員長らのインタ



＜土壌の放射能除去について篠原農水副大臣に説明をするディードゥフ氏（ナロジチの菜の花畑で）＞

ビューが交互に映し出され、私にとっては特に目新しい情報が提供されたわけではないのですが、映画として興味深く観られる切れ味のよい撮影と編集で、チェルノブイリが今でも「生々しい」問題であることをくっきりと印象付けるものでした。ちなみに、親子3代がチェルノブイリ原発で働いている（いた）と紹介されている家族の2代目にあたる方は、少し前に私も招かれナタネプロジェクトについて話した、キエフ工科大でのチェルノブイリ・シンポジウムにも参加していた人でした。

2時間ほどの上映が終わった後、監督がバンドの4人を含め画面に登場していた人たちを客席からステージに招き上げ、それぞれの一言があった後、監督及び登場人物らと会場との意見交換がありました。会場からの質問や意見は残念ながらそれほど面白いものはなかったのですが、もともと原子化学を勉強していたという監督は、「フクシマの事故が起こる前にこの映画の編集が終わったのは、全くの偶然だった。原子力そのものは善でも悪でもない。しかし、他の国ではどうかかわからないが、ベルギーでは原発は電気を作るため、あるいはエネルギー問題を解決するためにあるのではなく、金儲けのために運転されている。ただ受身の電力消費者になるのではなく、市民としての責任を受け止めて前向きに考え、行動するという姿勢を提案するために、自分はこの映画を作った。」という趣旨の発言をし、私としては非常に共感できました。

今後、ウクライナだけでなく多くの国でこの映画が観られることを期待したいと思います。

（5月25日）